心あったかニュース

星と地域の魅力をつなぐ

長野県北部の小川村は“星のふる里”として知られているそうです。このうち「小川天文台」と「小川プラネタリウム館」を管理運営する古谷浩さんは、星に導かれ、小川村にたどり着いた移住者だそうです。「小川プラネタリウム館」で生解説、夜は「小川天文台」で天体観測を案内する古谷さんは、出身は千葉県。理系大学を卒業後、東京都の商社やＩＴ関連企業に合わせて２５年ほど勤務していました。

「もともと星にすごく興味があったわけではない」そうです。カメラをはじめていて、テレビ番組で偶然見かけ、長野へ。宿泊先の乗鞍高原で満天の星空を目の当たりにし、こんなにもたくさんの星が見えるんだといたく感動しました。この体験を機に長野の星と星景写真の虜になった古谷さんは、以降、カメラと望遠鏡を車に積んで足繁く長野県へ通うようになり、ついに、移住も果たしてしまいます。そこで見つけた、村の地域おこし協力隊の募集は、「小川天文台」と「小川プラネタリウム館」の運営でした。天文台の大型望遠鏡もプラネタリウムの投影機も触るのは初めて。独学で操作方法を学び、長野県をフィールドに活躍する“星の先輩方”の元へ赴き、どのように説明すればお客さんに星の魅力をより伝えることができるのか、模索を続けました。同時に力を入れたのが、天文台一帯の景観整備です。小川村は、村内の各所から北アルプスが望め、標高が高い天文台の屋外からは、戸隠連峰から北アルプス、美ヶ原や八ヶ岳まで文字通り“一望”できます。村に伐採を打診し、園内の草を刈り花を植えて、美しい眺望を楽しんでもらえるように整えていきました。「自分が星を好きになったのは、天文学が入り口ではなくて、周辺の景色を含めた星の写真が撮りたいという欲求からでした。加えて、小川天文台やプラネタリウム館の来場者は、ほとんどが観光目的のお客さんです。綺麗な星空はもちろんですが、山の景色も十分楽しめるようにすれば、より多くのお客さんに来てもらえるんじゃないかと考えました」。天文台周辺は人工の明かりが届かないため、肉眼でも北アルプスに天の川が沈んでいく風景を見ることができます。また、明け方には朝日で赤く染まった北アルプスのモルゲンロートや雲海に出合える確率が高いそうです。

“星と緑のロントピア”としてさまざまな星関連の施設がそろいます。宿泊施設の「星と緑のロマン館」は全室から北アルプス、そして満天の星空を望むことができます。夕食と朝食には旬の食材をふんだんに使った品々が並び、１０、１１月頃には地元で採れた松茸尽くしの会席料理が味わえるのも魅力だそうです。（長野県公式観光サイトより）

編集後記

星が結ぶ縁が、ただの趣味に終わらず、どんどん発展しているのが、すごいと思いました。星が見える、地域は、ただの田舎というより、山も水もきれいなところなのだと思います。だから、その土地のいいところを探せば、たくさんあるということだと思いました。時間が止まったような、美しく、雄大な景色と星、日本にはそんなところがまだまだあると思いました。